

生きる

——映画文学人生論

参考：トルストイ『イワン・イリッチの死』米川正夫訳
監督：黒澤明（1952年 脚本：黒澤明 橋本忍 小国英雄
出演：渡邊勘治 志村喬 撮影：中井朝一
渡邊光男 金子信雄 音楽：早坂文雄
小田切とよ 小田切みき 小説家：伊藤雄之介
助役 中村伸郎 やくざ：宮口精二

彼には生きてきた時間がない。つまり、彼は生きているとはいえないからだ。

人間はみんな死ぬ。もはや余命いくばくもないと宣告されたとき、どうするかという切実な問題をテーマにした映画が黒澤明監督の『生きる』。

志村喬が演じる市役所の渡邊市民課長は三十年無欠勤で勤務し続けた実直な男だが、希望も情熱もなく、何の楽しみもなく、ただ漫然と惰性で仕事をしているだけで、生きているとはいえない。

そんな男がある日、病院で診察を受け、胃ガンを宣告された。生きていられる時間はせいぜい半年だという。がっくりきたが、大酒を飲んで酔っぱらったり、柄にもなく老いらくの恋をしたりしているうちにやる気が出てきて、下水堀の埋立地に新しい児童公園の建設に尽力するようになる。そして、雪の降りしきる夜更け、新しく完成した公園のブランコに揺れながら、「命短し恋せよ乙女」と歌って死んだ。めでたし、めでたし。

この男は市役所に勤める三十年間は生きていなかったが、死ぬ前の六ヶ月間だけは生きることができた。生から死へと死から生への二重奏——話がうまくつくられている。現実には平凡な男がそんなにうまく頭の切りかえが出来るとは思えないし、タイミングよく理想的なクライマックスを迎えることも難しいような気がするが、映画の観客は感動して、「課長、よかったね」と思う。

脚本は黒澤明、橋本忍、小国英雄の三人による



生きる ———— 映画文学人生論

共同執筆。原作はトルストイの『イワン・イリツチの死』で、大幅に改作されているといわれている。そこで、原作を米川正夫訳で読んでみた。

イワン・イリツチはロシアの裁判所判事、四十五歳。『生きる』の市民課長は五十代だから、それに比べれば若い。やはり死病にとりつかれ、がつくりきた。「人間は必ず死ぬ」ということを彼は頭では理解していたが、死ぬのはいつも他人であり、自分が死ぬとは思っていなかった。

官吏として立派な仕事をしてきた成功者だとうぬぼれていて、渡邊市民課長よりも態度がでかいが、それほど立派な仕事をしてはいない。最後は三日間、恐ろしい叫び声をあげて苦しみ続けた。

「そうだ、何もかも間違っていた」ところが、死ぬ二時間前になって、もがきながら黒い穴の中へ落ち込んで、一点の光明を認めた。自分の生活は間違っていたものの、しかし、まだ取り返しはつく、という思想が啓示されたのである。

「可哀そうだ……お前も……ゆるめてくれ(許してくれ)」と妻と子に言って彼は死んだ、

渡邊市民課長は六ヶ月間、生きることができたが、イワン・イリツチが生きたのはわずか二時間——それでもほんとうに生きた時間がゼロの人は幸せだったといえる。